

人間認識の場としての植民地体験 －中島敦「D市七月叙景（一）」（1930）を手掛かりとして－

陳 佳 敏

1. はじめに－先行研究および問題意識

中島敦（1909～1942）は日韓併合（1910）直前の1909年に生まれ、太平洋戦争が勃発した翌年の1942年に世を去った。彼が生きていた時代は、日清・日露両戦争を経て国際的な地位を高めた日本が欧米列強と肩を並べて、朝鮮や台湾など周辺のアジア諸国を半世紀に渡って植民地統治を展開していた時であった。まさにこの時期に生まれた中島敦は、好むと好まざるとにかかわらず、時代の波に巻き込まれるだけではなく、その人生もまた植民地とともに運命を共にしなければならなかった。

彼は幼い頃から豊富な外地経験を持ち、第二の故郷ともいえる朝鮮、旅行先である中国、勤務先としての南洋群島に足を運んだ。短い生涯であったが、少年時代から晩年に渡り外地体験を有する中島敦は、当時の人々の中で極めて稀な存在と言ってよい。そして彼自身もこれらの植民地生活に深い関心を寄せ、自己を託し作品を通して植民地の光景とそこに生きる人間達の感情、生活を描き出した。「山月記」（1942）「李陵」（1942）など漢学素養を生かした作品によって知られている中島敦であるが、その人生において初めての作品創作の源が植民地体験であったこと、またその体験が彼の一生を貫いたことから、植民地体験は中島敦のもう一つの側面を知る上で無視できない存在と思われる。

中島敦と彼の植民地体験については2000年代から注目を浴び、植民地の関連作品論、影響論、植民地主義に対する態度論など様々な角度から研究がなされている。その中で、朝鮮と南洋についての研究はかなり進められてきている。

少年時代の植民地朝鮮体験は中島敦の人生と文学世界において極めて重要な部分を占めている。例えば李順月氏は論文の中で「中島敦の朝鮮、朝鮮人を見る眼は、日本人のいわゆる差別的、同情的視点から描く像ではない。・・・一つの民族が他民族に支配され、本来の自由と自立を奪われることを否定し、それに抵抗す

る人間を肯定する中島敦の姿勢が見られている¹⁾とし、また川村湊氏も「被植民地の人間として生きている朝鮮人達の屈折した生き方に、眼をむけた²⁾」中島敦のことを評価している。さらに渡辺一民氏は「日韓併合の直前に生まれた中島敦は、思えば宗主国の弟子として植民地で育った最初の世代に属していた。そして外地育ちのこの世代こそ、閉ざされた日本の社会に懐疑精神と異文化に関わる新しい視点を持ち込んだ最初の人々であった³⁾」と指摘された。第二の「故郷」と言われるこの異郷体験は彼の性質、精神世界と文学創作に大きな影響を与えたことが伺える。

一方、晩年の南洋行も中島敦の後期作品の形成や精神世界に影響を覚えたことが議論されている。例えば、杉岡歩美氏は「中島敦にとっての＜南洋＞は「文明人」である自己を再認識する「場」として機能した。後年、『弟子』『李陵』といった作品が生まれたのも＜南洋行＞なしにはありえなかったと思われるのである⁴⁾」と指摘し、また陸嬋氏も「南洋行を通じて作家の心境が変化したのみならず、中島文学の変貌も果たしたのだ⁵⁾」とその重要性について述べている。

このようにこれまで朝鮮と南洋の植民地体験について様々な議論がなされてきた。しかしながら、その一方で中島敦の中国体験については言及されることが少なく、重要視されていない状況がある。それは中国体験がただの旅行であること、また中国を舞台にした作品が初期の習作であったり、未完のものであったりすることに、それが注目されない要因があると思われる。

ただ最近 10 年の間に、特に中島敦の中国体験を取り出して議論される川村湊氏がいる。同氏は論文「大連とハルピン」の中で「・・・そうした漱石（『満韓所々』）の視線よりは、中島敦の眼の方が、表層的ではなく、社会の構造にまで

¹⁾ 李順月「中島敦と朝鮮：「巡査のいる風景」を中心に」（『アジア社会文化研究 8』アジア社会文化研究会、2007）81 頁。

²⁾ 川村湊「中島敦伝（2）植民地の“虎”」（『アイ・フェール 14(4)』紀伊國書店総務部、2004）35 頁。

³⁾ 渡辺一民『中島敦論』（みすず書房、2005）219 頁。

⁴⁾ 杉岡歩美「中島敦にとっての＜南洋行＞—昭和初期南洋という場—」（『同志社国文学 68』同志社大学、2008）73 頁。

⁵⁾ 陸嬋「中島敦の南洋行に関する一考察—＜南の空間＞における＜境界性＞を中心に」（『言語・地域文化研究 19』東京外国語大学大学院総合国際学研究科、2013）120 頁。

及んで深い把握をしていることは確かだろう⁶⁾と述べている。また植民地問題は「常に違和感、乖離の感覚として生み出されてくる⁷⁾」ものであり、植民地生活には「不吉なものの影、メランコリーや怯え、恐怖や不安もそこにはあった⁸⁾」と指摘している。いわゆる中国体験は中島敦の植民地への眼差しや自意識が読み取れる場として位置づけられていたことである。つまり、その体験は単なる旅行以上の意義を有していたことが言えるだろう。

しかしそれにしても、中島敦と彼の中国体験についての研究は依然として足りず、未だ概念的なものに傾き、徹底的なテキスト分析を通して中国体験を彼に与えた影響関係についてのものがあまりないような気がする。そこで小論では、「D市七月叙景（一）」（1930）という初期に執筆され、無視されやすい作品を手掛かりとして、全面的なテキスト分析を通して中島敦の中国への眼差し、そして中国体験が彼の精神世界に与えた影響について明らかにしていきたい。

2. 「D市七月叙景（一）」（1930）における創作背景

「D市七月叙景（一）」は中島敦が東京第一高等学校高校3年生の時に、学校の『校友会雑誌』（1930年1月）325号に掲載された短編小説である。作品の舞台となっているのはまだ建国される前、関東州に属している、日本の租借地の大連である。物語は3章で成り立っている。各章の主人公と言えば、1章は満鉄の総裁。2章は満鉄に勤める日本人の社員。3章は中国人の苦力である。作中の叙述から推測するに、これは1929年の7月のある日、最上層、中層と下層という3つの階層の一日の叙景を描写しているものであることが分かる。そして、「D市七月叙景（一）」の作中時間を考えれば、1929年の7月から数ヶ月間であった⁹⁾ことから、この作品はいわゆる作者と同時代で、リアルタイムで当時の中国を描いていることが伺える。当時、中国の情勢を反映する作品がほとんどいないことと合わせて考

⁶⁾ 川村湊「中島敦伝（3）大連とハルピン」『アイ・フィール 15(1)』（紀伊國書店総務部、2005）33頁。

⁷⁾ 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書、1990）78-79頁。

⁸⁾ 同上

⁹⁾ 藤村猛「中島敦＜D市七月叙景（一）＞論」（『安田女子大学紀要 34』安田女子大学、2006）3頁。

えると、貴重な存在と言えよう¹⁰。さらに言えば、中島敦は同時代の中国を描いているということは長年に渡る中国体験がないと生まれないものである。ここではテキストの分析を進める前に、まず、中島敦の中国体験の状況と時代的背景、また作品の舞台となる大連の様子について見ておきたい。

34歳で世を去った中島敦は、その短い人生の中で何度も満州へ渡っている。年譜によると、彼は1924年、1925年、1927年、1932年、1936年の5回で中国の東北地方や、江南地方へ行った記録が残っている¹¹。しかし実際、残された記録より彼はより多くの回数で中国へ足を運んでいる。最初に訪れたのは1924年の夏であった。その際、彼は関正猷・山本洗の従兄達と旅順の比多吉叔父宅に一ヶ月ほどいた¹²。また1925年5月、京城中学校（現ソウル高等学校）の修学旅行で南満州を旅行した。この年の10月、父、中島田人は京城龍山中学校の教諭をやめ、家族連れで関東庁立大連第二中学校（1931年退職し帰国）に勤務することとなる。そのため、東京の高校、大学へ通学している中島敦は毎年大連へ足を運び、帰省するようになった。それに、1927年8月帰省中の彼は湿性肋膜炎にかかり大連の満鉄病院（その後別府の満鉄療養所に移り、さらに千葉県まで転地療養した）に入院し、一年間休学した¹³ことから、大連は彼にとって住み慣れた都市と言えるだろう。

大連のほかに、中島敦は中国の北方と南方にも旅行した。1932年8月、当時旅順に赴任していた伯父の中島比多吉を頼って、大学3年生の中島敦は旅順、大連などの南満州、及び天津、北平（現在北京）などの中国北部を旅行した¹⁴。さらに1936年にも蘇州、杭州、上海をめぐる南方旅行を行ったのである。

このように、中島敦の1924年から1936年にかけて頻繁に中国に渡っていることがよくわかるだろう。20、30年代中国の時代状況を見てみると、まさに変動の多く、不安定な状況に置かれていた時期である。内部には1926年に北伐戦争が始まり、1927年に国民党と共産党との合作が破綻し、軍閥間の戦争が相次ぎ、そし

¹⁰ 関瑜『新しい中島敦像—その苦悩・遍歴・救済』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2011）90頁。

¹¹ 中島敦『中島敦全集3』（筑摩書房、2012）年譜により、447-450頁。

¹² 荘島ケイ子「敦と私」（高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002）236頁。

¹³ 中島敦、全掲書（註11）448頁。

¹⁴ 川村湊「中島敦伝（4）北方彷徨」『アイ・フィール15(2)』（紀伊國書店総務部、2005）30頁。

て1928年に南京政府は北伐を再開し、その後も断続的に対立状態が続くという、軍閥、国民革命軍、赤軍の勢力による政局の四分五裂、またお互いに戦争や軍事衝突を通して政権を争っている時期であり、外部にはソ連、英、米、日本がそれぞれ中国を支配するために、各勢力の後押しをし、勢力分割を拡大しつつある時でもある。そのうち日本は、1905年日露戦争の勝利により、徐々に中国への支配を進め、1932年3月傀儡国家の満州国が成立するに至った。そして日露戦争の激戦地であり、たくさんの政府機関が置かれた旅順、大連はまさに日本が東北地方における植民地統治の大本営となったのである。

中島敦はこのような時代状況の中で、8年間大連と日本とを往復し続けたのである。日本の植民地時代の大連は、ロシア時代に残された棲み分けの原則が採られ、西欧人町であった場所には日本人が住み変わり、大連市の中心に位置する円形広場を大広場（【図1】）に変え、広場を取り囲むように大連市役



【図1】大連の中央大広場¹⁵

所、大連警察署、ヤマトホテル、横浜正金銀行、朝鮮銀行、イギリス大使館、東洋拓殖会社など重要な施設が次々と新しく建てられていた。また、鉄道建設、東洋一の下水道、路面電車、電気ガスの供給など都市基盤整備を整い、大連と満州の玄関である大連港の港湾建設にも力を注いだ。大連はまさに国際的な商港都市として作りあげたのである。

一方、このような実体験とともに、彼の心の中で中国に対して、また一層複雑な感情がある。周知の通り、中島敦は漢学名門育ちで、幼い頃から漢学の素養が高いとよく言われる。しかもその素養は、本格的に伯父達や父から句読を受けるのではなく、幼くして彼等の姿を見、そして無意識中に彼の血統の中、また魂の中に受け継がれたものである。孫樹林氏は「中島一族の血液に浸透している漢学素養、儒学思想が、祖父の撫山より、斗南伯父を経て、自分自身にまで伝わっているのである¹⁶」と指摘している。氏の主張したように、祖父や伯父達から中島敦

¹⁵ 西井一夫『決定版 昭和史 別巻Ⅰ』（毎日新聞社、1999）35頁。

¹⁶ 孫樹林「中島敦＜斗南先生論＞—東洋精神の博物館の標本」（『国文学攷181』広島大学国語国文学会、2004）10頁。

へという血の流れで漢学への愛好が子供の頃からすでに心の中で植え付けられていた。しかも、その愛好は強制的に押し付けられたものではなく、心から愛し、みずから積極的に漢籍や漢文を勉強したものである。つまり、中国への親しみと憧れは子供の頃から養われてきて、内面化したものであると言える。

このように、中国への愛好を内在化し、中国に憧れを抱いている彼の目にはどのような大連が映ったのか。また中国体験を通して精神世界がどのように変わり、そしてこれからの文学創作に影響を与えたかについて、以下はテキストにおける3つの階層の登場人物の分析を通して浮き彫りにする。

3. 身内の陰謀に左右されるM総裁

第1章の主人公はM社総裁のY氏である。彼は「関東州だけの行政権を持っているに過ぎない関東庁長官などの威勢は、とても彼の足下にも及ばなかった」「南満州の王様」として描かれる。周りの人はすべて彼に頭を下げ、彼によって行動する存在でしかないと思像される。しかし、中島敦はこのような最上層にしながら高い権力を持ちすべてを支配するにふさわしい彼の様子を描いていない。作中のY氏の人間像は総裁という立場でありながら、吃逆に振り回されて苦しむという姿に代表されるように俗な存在にはかならない。

物語は、総裁Y氏が吃逆に襲われる場面から始まる。一晚中吃逆が止まらず、夜を明かした彼が、邸中の者すべてを巻き込み大騒動を巻き起こすのである。吃逆のため彼は食事も睡眠も満足に取れなかったばかりか、自分の態度まで自意識によってコントロールできない状態に陥ってしまう。

別に急ぎもしないのに、彼はしきりにイライラして夫人や女中達を叱り飛ばした、彼自らも、このような性急さは彼の様な大総裁の態度としてふさわしくないことに気がついてはいたが、この場合この意識は却って彼を一層いらだたせるのであった¹⁷。

その他にも運転手や小間使いなど罪のない周りの人を理由もなく怒鳴りつけた。このただの生理的現象に過ぎない吃逆は止まることなく十時間も続き、実に

¹⁷ 中島敦「D市七月叙景（一）」『中島敦全集Ⅰ』（筑摩書房、2012）343頁、以下頁のみ記す。

凄まじいものとして描き出されていく。

残虐で奇妙な発作はほとんど 60 秒毎に彼を襲い、彼の神経を怯えさせ、彼の全身の筋肉の震動に起こさせた。あまり頻繁なので終いには胃のどこかに疼痛さえ感ずるようになった。(345 頁)

つまり、彼はこの生理的な吃逆にコントロールされるうちに自らの醜さを暴露せざるを得なくなり、大総裁の態度として相応しくないことに気づきながらも、「大総裁」でない人間像を露呈させている。彼は「この痛烈な全身的の震動にはすっかり手こずってしまった」のである。さらに、彼はいつかまた出てくるか分からない吃逆のため、精神的に憶病、不安、恐怖に苦しむようになっていく。

彼はじくじく額から湧き上がってくる汗をハンカチで拭いながら、片手で臆病そうに、鳩尾のあたりを押さえてみた。(中略)

彼は恐る恐る指先で胃の上部をそっと押してみた。どうやら何ともない様子である。彼はほっと息をついて、初めて椅子に腰を下ろした。長い間、抜けなかった刺が分けなく、取れた気持ちであった。(346-347 頁)

このように、作中では中島敦が描く満州の王様は、王様としての権威や冷徹さを見せず、却って吃逆という自分の身体の内面に起こる不随筋の痙攣によって悩まされ、振り回され、そして自意識によってコントロールできない状態に陥る俗な人間像として描かれることが明らかになった。

また、先ほども指摘した通り、「D市七月叙景（一）」はリアルタイムで当時の時代を表しているものである。作品にはM社、Y氏、T内閣とぼかしているが、実はモデルがあった。これまでの先行研究でもすでに指摘されているように、作品の書かれた時期と内容によると、M社総裁のY氏のモデルは1927年から1929年まで南満州鉄道株式会社10代目の総裁だった山本条太郎だと推測できる。彼は満鉄中興の祖と呼ばれ、またその名称にふさわしい実績を挙げた人物として知られている。しかし、「南満州の王様」と呼ばれる一方で、順調に事業経営を進めていたにもかかわらず、彼は現実の政治の力の前で、自らが満州で得た地位と事業に

あつけなく終止符を打つことになる。

作品において「あの重大事件のこと」、「かつてなかった程の不評を蒙ったT内閣」、また彼の辞任の挨拶の草稿について言及している。安福智行は作中に出てきたK時報に掲載されたあの重大事件についての場面は満州日報 1929 年 8 月 18 日付朝刊の記事を参考にした¹⁸と指摘した。その記事によれば、あの重大事件とは当時の日本政府が一般国民にはその真相を秘匿しようとして、国内の新聞やメディアにおいては「満州某重大事件」と称した、いわゆる 1928 年 6 月 4 日関東軍の謀略による張作霖の爆殺事件である。東京朝日新聞市内版昭和 4 年 6 月 5 日付、奉天特派員の報道によると、これらはことごとく「綿密を極めた便衣隊の所業」と主張し、また 6 日同新聞には「我警備隊には責任全然なし」という大きなタイトルで陸軍省の立場表明をしている。事件の真実が戦後になって初めて公表されたものなので、当時の中島敦も一般国民と同じく新聞などメディアに振り回される側であり、真相を知るはずはないのだが、ただ中島はこの事件について疑問を持っているように見える。作品の中で「あの重大事件」の新聞掲載について描かれた場面がある。S 理事は、M 総裁に向かって、「K 時報という支那新聞があこの重大事件のことをまた誇張し、例の打倒日本帝国主義を付け加えて書いている」という報告をしていたのである。それを聞かされた M 総裁の行動は以下のように描かれている。

「馬鹿な、そんなことが。」と総裁は慌てて、火でも消し止めるように手を振り回しながら云った。彼はこんな芝居には慣れ過ぎていた。あまり慣れているために、仲間同時の普通の場合にでも、つい、習慣的に芝居をしてしまうのであった。(346 頁)

彼の行為を「あわて」ることに形容し、また「芝居」と表現しているのは、まさに事件の背後にあるものを想像させる意図による表現であると言ってよいだろう。また後年執筆された「北方行」(1933-1936)の中でも「張作霖が奉天へ逃げ出す

¹⁸『満州日報』1929 年 8 月 18 日付朝刊の「排日紙『醒時報』/捏造記事を掲ぐ/付属地では発売禁止」という記事で、「奉天の排日紙醒時報は本日の紙面より＜日本人張作霖謀殺＞と題する見出しの下に張作霖氏の爆死は日本の謀計なる如く捏造し猛烈なる排日的文字を羅列し今後連載することとなった。」安福智行「＜D 市七月叙景（一）＞論—＜満州日報＞—を視座として—」（『京都語文 8』佛教大学、2001）75 頁参考。

途中で怪死を遂げた」という表現を使っている。それは事件の原因が謎であることを明示し、疑惑を強調することであった¹⁹。つまり中島敦はこの事件に対する日本側の報道に不信感を抱いていることが伺える。

一方、日本国内ではこの事件の責任処理をめぐって当時の田中義一首相が、昭和天皇から叱責を受け内閣（作中のT内閣のモデル）を瓦解することとなった²⁰。そしてT内閣によって「現在のこの地位に用い」、また「内閣が変わるとその余波で満鉄の上層部も入れ替わるといった政党内閣の弊害²¹」に振り回される山本総裁は満鉄から去らなければならない結果となる。ただ作品に出てきたのはまだ総裁の「辞任の挨拶の草稿」を準備している段階である。この「辞任の挨拶の草稿」は、「満州日報」掲載の記事と、ほとんど同じ²²であるという指摘がある。中島敦は作品にリアリティを持たすために新聞の記事を参照にしたのだろう。

つまり、関東軍の暴走により張作霖爆死事件が発生し、そしてその責任処理のため田中内閣が瓦解し、それにより満鉄総裁は辞任の道を余儀なくされる。これは、いわば身体内部の未知でコントロールできない吃逆に振り回されるように、権力者内部という身内の陰謀に左右される不自由な人間、Y氏の状況なのである。「南満州の王様」といっても、いつ来るか予想できない吃逆に悩まされ、また政治や陰謀に振り回される運命に翻弄される人間なのである。中島敦は吃逆に苦しむ満鉄総裁を劇画化し、比喩的な描き方によって、鋭い眼差しで陰謀と欲望に満ちた植民地の現実を看破し、植民地支配への否定と疑問を表している。日本の植民地下に置かれた朝鮮半島で長年生活していた彼は中国体験によってその疑問をさらに深めたに違いないだろう。

4. 不安な渡満者

そして第2章に登場するのは、満鉄に勤める中年日本人社員と彼の家族一妻と4人の子供一である。作品はこの一家のD市近郊の海水浴場の貸別荘で一夏を送る姿が描かれる。場面はよく晴れた日に、「5つ位の男」、「小さい姉」と「18、19

¹⁹ 渡辺ルリ「中島敦〈北方行〉に見る1930年中原大戦下の中国—〈北方行〉序論—」（『東大阪大学短期大学教育研究紀要7』東大阪大学、2009）110頁。

²⁰ 加藤聖文『満鉄全史〈国策会社〉の全貌』（講談社、2006）108頁。

²¹ 同上、87頁。

²² 安福智行、前掲書（註18）75頁。

の身体の大きい青年」の長男が奇麗な大連海岸にて砂遊びというほほえましい情景から始まる。その後も、一家の船での蟹釣りをする様子、畑のトマト狩り、また子供達の楽しい遊びなどが描かれる。人がうらやむほど幸せな一家の団欒と睦まじさである。それはまさに当時多くの夢を抱いて渡満する日本人の理想的な生活ともいえるだろう。その中年社員は満州に渡って満鉄に入り、初めてこのような生活を手に入れ、それまでにない幸福を感じている。

彼は、いつの間にか、もう十五年ほど前の東京での生活を思い出していた。父親のなかった貧しい彼は（これとてあまり豊かでない）今の妻の家から金をだしてもらって、やっと高等専門学校を出ると、すぐに、お決まりの下級会社員の生活であった。（中略）それから、今の長男が生まれると間もなく、知人の伝手で、この苦しい生活から逃げるように満州に飛び立ったのであった。生活は予想以上に楽であった。収入は内地の其れにほとんど倍した。彼は其れ以外、この M 社を離れなかった。そして今ではここの社員クラブの書記長を勤めていた。内地で、一生、いくら勤めた所で、とても、今の自分位の生活は出来なかったろうに、と、彼自身時々、非常に満足で以て考えてみる程だった。（360 頁）

15 年前、下級のサラリーマンで貧しい生活をした彼が、満州にやってきて、給料が増え、外地手当が加算されるという好待遇²³を以て、D 市で「極楽」を感じている。また、満鉄では福利厚生制度や住宅、病院、ホテルなどの施設が充実していて、多くの満州移住の日本人にとって、満州での生活はレベルアップに繋がった²⁴。

彼のような日本よりよい生活を求めるために夢を抱いて渡満してきた日本人は少なくはなかった。そもそも満州への日本人移民の送出を呼んだ代表的な論者は初代満鉄総裁に就任した後藤新平であった。彼は 50 もしくは 100 万人の日本人を満州に送り込むことを提唱した²⁵。ただ満州へ行けば成功や出世に繋がるとか、一

²³ 川村湊『満州国 砂上の楼閣「満州国」に抱いた野望』（現代書館、2011）99 頁。

²⁴ 同上、100 頁。

²⁵ 塚瀬進『満州の日本人』（吉川弘文館、2004）37 頁。

般国民の立場で移民のことを考えていたのではなく、多数の日本人を満州に移住させれば、「満州ハ事実上帝国ノ領土トナリ、後年還付ノ場合ニ於テモ我ノ利益ハ確定不動²⁶」となるという考えが目的の根本にあった。つまり、満州移民の政策は権力者による満州権益の強化に繋がる発想だったのは言うまでもない。

勿論これは裏話で、表には国民に対して満州の夢を作りあげた。夢のような成功談が日本中に流布、浸透し²⁷、多くの人の目を光らせたのである。そして第一次世界大戦により日本政府が満州で獲得した新権益をきっかけにして、1916年以後に満日本人は増え、1929年時点には約216,000人を越えるに至った。その中には、大連に住む在満日本人が40%を占めており、最も多かった²⁸。しかし、「新天地」に來たとしても、現実は残酷である。主人公のように成功を遂げた日本人は極めて少なかった。西澤泰彦氏はこれについて以下のように述べている。

異民族支配の上に成り立つ大連の経済には、国内よりも厳しい条件が待ち受けていたことは想像に難くない。(中略)「大連の夢」という自らの繁栄をつかんだのはほんの一握りの人々であり、資力も人脈もない日本人の多くは、夢とは裏腹に落ちぶれていくという現実があった。日本を出る時、周囲の期待を背負ってきた者、あるいは多額の借金をしてきた人達は、「功成らずば帰るには帰れず」路頭に迷うほかなかった²⁹。

しかも、同じく満鉄の社員と言っても、その差が大きかった。満鉄は傭員という名称の人員と、1915年から儲けられた雇員を加えて、職員―雇員―傭員というランクが厳然と分けられた会社であった³⁰。職員より低いランクの傭員は日本国内で住んでいた住宅より劣悪な社宅をあてがわれ³¹、子供におもちゃの一つも買ってやるができない³²、みすばらしい生活に苦しまされる人間であった。彼等は満

²⁶ 田川真理子「満州移民事業の理念と現実〈前篇〉」(『言葉と文化4』名古屋大学、2003) 247頁。

²⁷ 西澤泰彦『図説大連都市物語』(河出書房新社、1999) 74頁。

²⁸ 塚瀬進、前掲書(註25) 46-47頁。

²⁹ 西澤泰彦、前掲書(註27) 74頁。

³⁰ 塚瀬進、前掲書(註25) 30頁。

³¹ 同上、61頁

³² 同上、177頁。

州で一種の徒労感と彷徨を覚えたに違いない。ある意味では、彼等は権力者の欲望に騙された人間である。この不安と浮遊感覚は、D市で想像以上に幸せに暮らしている満鉄社員ですら感じていたのである。

しかし、ずっと不如意な生活に慣れてきた者は、幸福な生活に入ってから、そんな幸福にほんとうに自分が値するかどうかを臆病そうに疑って見るものだ。そして、さらに滑稽なことに、その幸福の保証のために、時々小さな心配や苦勞をさえ必要とすることもあるのである。(361 頁)

彼の不安と臆病な心に存在するものとは、ようやくつかんだ幸福な生活がいつなくなるか予想できないことにある。なぜなら、彼の幸せな生活は自ら必死に努力して得た結果ではなく、被植民地で權益を奪い続ける満鉄への依存によって与えられたものにほかならないからである。1929年時点では、在満日本人20万人の内、90%近くの人口が関東州(49.6%)と満鉄付属地(43.0%)という限定された場所で生活し³³、そしてその半分をしめたのは満鉄の社員とその家族³⁴であった。つまり彼等は小さい空間に閉じ込められ、生活のすべてが満鉄の影響下に置かれていたのである。国内政争や満州をめぐる政治経済情勢の変化に大きく影響を及ぼす植民地的色彩の濃い満鉄に付随される以上、当然彼らの生活もそれに左右される。つまり、その不安は植民地生活そのものへの不安と怯えでもある。それゆえ、15年間大連に住んでいても、長男は「いずれ東京あたりの高等学校でも受けるつもり」であるし、彼も一度もここに骨を埋めるつもりはなかった。

こうして満州は彼にとって、極楽であった。にもかかわらず、彼は、子供達ももう少し成長するのを待って、日本に帰ろうとしているのである。まだ日本を知らない子供達に、彼等の父の生まれた国を見せるために、雨戸というものの、東屋、築山というものを見せるために、それから、老年は、どうしても彼の故郷の蜜柑と小川と遠い海とのささやかな風景の中に小さな家でもたてて暮らしたいという彼自身のいかにも日本人らしい望みのために……(361-362 頁)

³³ 塚瀬進、前掲書(註25)46-47頁。

³⁴ 同上、50頁。

このような考え方は主人公一人のものではない。当時在満日本社会の一つの特徴であり、在満日本人にとって集合的な記憶であると言ってよい。塚瀬進氏はこれについて以下のように指摘する。

渡満した日本人の多くは満州に骨を埋める覚悟がなく、やがて日本に戻ることを念頭に置いていた。(中略) 渡満の目的は永住ではなく、金を稼ぐことにあったので、目的を達成すれば帰国するのは当然の選択であった³⁵。

つまり、彼等にとって満州はただの出稼ぎ先であり、一時的な滞在地に過ぎないことが伺えるだろう。その考え方もまた彼等の根無し草の不安意識に発車をかける。

以上述べてきたように、第2章では不安な渡満者の姿が描かれる。彼はD市で極楽を感じながらも臆病と疑惑に落ちる。なぜなら、彼の生活は自らの意識によって充実につかんだ生活ではなく、いつ消えて行くか見当がつかないものであり、そこにある幸福も不幸も政局に左右されるものだからである。一見自由で楽な生活をしていたように見えても、実は権力者の欲望に振り回される不自由な存在でしかないのである。1章の吃逆に振り回される不自由な満鉄総裁のように、2章においても、中島敦は人間の心の機微に注目し、幻のような植民地空間を暴露している。

5. 被害者としての苦力

最後に3章で登場する二人の満人苦力の話を見してみる。

不況によって働き口を失い、二人はD市七月の午後の日差しにあえいでいた港で仕事を探す。しかしあちこち探したが、到頭見つからなかった彼等はお金がなく、行く場所もなく町中をふらふらする。第1章と第2章で描かれた綺麗な海岸、町中の自然や美しい市街などとは違って、苦力を取り巻く風景はまるで別世界のように一変した。「ひどく蒸れた尿臭のする狭い横町」、「屠られた豚の血と、金蠅と、青臭く涸れた溝」と「黄や赤のすすけた招牌」の間、また「痔疾や性病の薬の広告」の側において、二人が見かけたのが同じく下層被植民地人の売春婦たち、

³⁵ 塚瀬進、前掲書（註25）171-172頁。

職人、商人、苦力と乞食などであった。彼等は近代の商業都市としてのモダン都市大連に属さない、否、属することができなかった。どこへ行っても厄介ものであり疎まれる存在でしかない。

社会のもっとも底辺の被植民地人として苦力が受ける差別、蔑視、そして搾取される生活は苦しくて悲惨である。貧困に迫られ、明日を生きて行くために自ら欲しないことであってもしなければならなかった。その中の一人の苦力は今のどうにもならない事情を考え、自身の過去を回想する。

一体、俺は、どうなるのだろうか。また、この前の時のように、三日間、飲まず食わずで、とうとう警察署の前でわざと乱暴を働いて、やっと留置場で飯にありつける様では、全く敵わないが、・・・・・・ (369 頁)

途方に暮れて仕方なくあえて道徳に反することをやってしまう。そして今日一日中また何も食べていない二人はある飲食店の「厨房の中から熱い臍物の揚げ物の匂い」に誘われて、空腹に耐えられず、「何とかなさ、食ってしまえば」と、ついに無銭飲食をする。結局満腹になり酔っぱらった二人は亭主に白昼の道路に投げ出された。

「失せろ！この、いんちき野郎奴。」

彼は力を込めて、二人の腰のあたりを蹴っ飛ばした。二人は、だらしなく土間の上に転がった。亭主は、其れを追いかけて、二人の襟首を両手で掴むと、戸口から、眩しい往来に力一杯抛り出した。(372 頁)

彼等は時代、植民地政策の被害者であり、本来は D 市の主人公であるべきだが、迫害を受け不合理な軽蔑（差別）を与えられている³⁶。近代モダン都市大連において、最下層の苦力達はこの空間の余計なものとして、人間性さえ認められず、明日の見えない日々だけが長く続いている。彼らのような苦力は、植民地満州の至るところまで散在する。

この苦力の多くは中国の山東省から渡ってきた人々である。安定的な生活を求

³⁶ 藤村猛、前掲書（註9）7 頁。

めて、またお金を稼ぐ為に移民してきたが、ここでは成功が彼達と無縁なものであり、居場所さえなかったのである。結局、彼らが単純な力仕事に従事する苦力になったのも当然の成り行きであった。豆粕を運ぶ苦力（【図2】）もいるし、船へ荷物を積み込む苦力もいる。特に大連港の荷役に従事していた



【図2】大連埠頭苦力の豆粕搬出³⁷

苦力だけで2万人ほどがいると言われている。彼等のほとんどは短期間の契約労働者で、生活条件が悪い。そして、権力者がそれらの苦力を一元化、全面的に支配するために、苦力収容所まで建設した。表面的には苦力を住居させ、生活状況を改善させるかに見えたが、実際には一人あたり一坪にも満たない居住空間の提供³⁸は彼等を奴隷扱いにし、また徹底的に管理、支配した。

【表1】大連の日本人・中国人の賃金³⁹

職業	民族	大連
大工	日本人	3.0
	中国人	1.0
ペンキ職	日本人	2.7
	中国人	1.0
鍛冶職	日本人	3.0
	中国人	0.9
活版職	日本人	2.2
	中国人	0.9
雑役夫	日本人	1.5
	中国人	0.5

(単位：銀円)

一方、同じく肉体労働者といっても、日本人と中国人の賃金の差は大きかった。【表1】は1926年7月大連にいた肉体労働に属する職業の賃金について示すものである。表から分かるように、どの職業も日本人と中国人とでは賃金に2-3倍の差がある。つまり、極めて不公平で苦痛な生活を送らざるを得ないのが彼等の現状であった。

しかし、作中の二人の苦力はこのような一般的な肉体労働者にも及ばなかった。彼等は働き口も、お金も、行き場も何もなく、これ以上なく悲惨な生活をしているのである。彼等は空腹さえ満たされれば、それ以上の望みはなかった。

³⁷ 西澤泰彦、前掲書（註27）75頁。

³⁸ 藤村猛、前掲書（註9）7頁。

³⁹ 塚瀬進、前掲書（註25）193頁。

投げ出された二人は投げ出されたままの姿勢で、重なりあって倒れたまま、動かなかった。彼等はいいい気持ちになっていた。殴られた節節の痛みを除けば、すべてが満ち足りた感じであった。腹は張っているし、アルコールは程よく全身に廻っている。一体、これ以上の何が要ろう？（中略）

二人は白い埃と彼等自身の顔から流れている血の匂いとを嗅ぎながら、ひどくいい気持ちで、重なり合ったまま、こんこんと眠りに落ちていった。（372-373 頁）

二人は無銭飲食をして殴られて道に放り出されてもこれ以上なく満足を覚えている。植民地支配によって不合理な差別を受け、また生きることにも迫られ、第2章の日本人社員が日本にいた時以上の悲惨な状況に陥っている。彼らはどこにも逃げる道がない存在である。最下層の苦力より自由意志のなく、不自由極まる人間はどこにいるだろうか。この時期に満州へ渡るほとんどの日本人が目当たりにした苦力が人間としてではなく、一つの風景として、また動物としてもっとも厄介な存在であったことは言うまでもない。しかし、中島敦は彼等を主人公として描き、下層労働者—いわゆる人間として見ていることに彼の人道主義的な面が表われていると見ることができる。彼は極めて繊細な観察力と描写で彼等の苦しみを表現し、そして最下層の苦力に同情を感じただけではなく、日本政府の植民地政策の野蛮さへの疑問もより深刻化していったのであろう。

以上のように、D市に住む3つの階層の人々を分析してきた。第1章の満鉄総裁は身内の吃逆に振り回されて「大総裁」にふさわしくない態度を表出しているように、彼は「南満州の王様」であっても、結局国内政争、身内の暴走により辞任に追い込まれる不自由な人間である。また第2章の渡満者はD市に来て満鉄社員になり想像以上の幸せな生活を送っているが、植民地での生活を続ける限り、その幸せがいつなくなるかという不安に苛まれ、自らの生活を自分の手で掴めない不自由な存在として描かれる。さらに第3章の二人の苦力はそのすべてが植民地支配によってコントロールされ、単に生きることさえこれ以上なく贅沢なことであるという自由意識のない人間はかならない。

つまり、一見植民地大連にいる3つの無関係な階層であるが、実にこの満州社会においてそれら全てが不自由な人間であり、自らの意識によって動いているの

ではない点で共通している。言い換えれば植民地満州にいる人間はみな植民地支配そのものに操られて、操り人形のような存在ではないかと思われる。次の一刻は如何なる運命に翻弄されるのか、自らの人生をコントロールできない不確かさ。それは中島敦の植民地政策の野蛮さへの否定と批判であると同時に、中国体験において初めて、運命の悪意と人間存在の不確かさを植民地満州にいる人間の観察を通して意識したのである。

そして、これらの観察と発見によって、中島敦の精神世界も変わりつつある。上述でも指摘したように、中国は彼にとって特別な場所であり、憧れの地である。漢学と中国の歴史文化は中島敦の付き物のように彼の体と共存している。英雄が登場し、長い歴史をもち、輝かしい文明と文化を擁していた中国は彼の心に描かれている世界であった。しかし、現実はどうだったろうか。陰謀、差別、圧迫、混乱、不安定、悲慘に満ちた世界は中島敦が目当たりにした現実である。彼は一方で中国を愛しながら、一方で中国を否定しなければならなかった。つまり高校時代の中国体験によって、「こんこんと眠りに落ちて行」く中国の現実、失望感と憧れの崩壊を覚えたのだらう。

中国への関心を持つ芥川龍之介は中国に旅した後、「現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、芸術、悉墮落しているではないか？（中略）私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない⁴⁰」と述べている。彼は中国への愛は一種の外向けの攻撃と蔑視に変えたが、中島敦の場合は中国への親しみが彼の体に根付いて簡単には抜け出すことができなかった。それと、彼の自己を責める性質のためでもあるが、中国の現実を意識した時、内向けの自我への不安と懷疑に変えたのである。彼は中国を否定すると同時に、自我も否定しなければならなかった。これは他者の存在の不確かさを感じる一方、自己、あるいは人間存在そのものの不安と懷疑をも感じなければならなかったのだといえよう。

6. 終わりに一人間存在への追及

1926年、中島敦は5年半に渡る人生初めての植民地体験—朝鮮体験を終えた。「はじめに」でも述べたように、少年時代のこの体験は彼の生涯に大きな影響を及

⁴⁰ 芥川龍之介「長江遊記」電子テキスト <http://homepage2.nifty.com/onibi/tyo.html> (2014/11/11 検索)。

ぼしたと言われている。そしてこれによって「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ—」（1929）という習作が執筆された。この作品においては、日本人と朝鮮人を同じ場面に置き、民族の対立をストレートに描き、植民地社会の矛盾と現実を様々な人間像を通して暴露する所が評価されている。少年時代の植民地朝鮮体験により彼は植民地の現実を発見し、また日本政府の植民地支配への疑問が芽生え始めたのである。

ただし、これらの民族の相克や植民地支配の悪や歪みより、「D市七月叙景（一）」においては、植民地社会の3つの階層を見出し、彼等はどのように存在しているのかを機微にまで描いていることが伺える。それは、陰謀に満ちたまぼろしの満州、また被害者としての苦力達の悲惨な生活を見た時に植民地支配の野蛮さを再認識しただけではなく、その特別な社会における人間存在そのものに目を引かれた証ではないか。つまり、中国体験は朝鮮体験に比べると植民地支配への疑問や、また人間認識と人間存在の不安と不確かさがより深まったのだと言えるのではないだろうか。

中島敦の大学時代は沈黙の時代と言われている。高校時代の盛んな創作欲とは正反対に、大学ではほとんど書かず、活字として発表される作品は一篇もなかった。1932年頃に書かれたと思われる「断片十一」において中島敦は自らの生活における変化に気づいた。

いつの間にか、内部まで変蝕してしまっていたのである。その野沢に行った前後、いや、もう少し詳しくいうと、さらにそれから半年ばかり以前。其の頃から私の生活の変化が次第に起こり始めた。それは私が、高等学校を卒えて、大学に入った年の春→夏にかけて始まった⁴¹。

「内部までの変蝕」というのは、1930年代前半の中島敦が中国体験を通して、高校時代の社会的な関心から、内面的な人生、生命、自己という観念的なものに悩まされるようになることであろう。子供の頃の植民地朝鮮体験によって中島敦はその人間社会の様々な悪に目覚め、また見た現実と人間に疑問を感じ始め、そして高校時代の中国体験によって彼の心の疑問はより深まり、さらに漢学との複

⁴¹ 中島敦、前掲書（註4）411-412頁。

雑な感情や人間の背後にある世界への発見から自己の身体に存在する矛盾にも意識を向けるようになった。大学時代の3年間こそ彼が自己と他者についてゆっくりと思考した時期だと思われる。

そして、1933年卒業後取り掛かった「斗南先生」で描かれるのは、他者への観察を通して自己を発見するものであり、「北方行」においては自我の屈折した感情が表出し、そして「虎狩」にも他者と自我の認識が描かれていくのである。さらに、後年の「カメレオンの日記」(1936)と「狼疾記」(1936)には灰色で苦悶な雰囲気漂い、一種の哲学的懐疑、また人間存在の不安など極めて屈折した自己像が書き込まれたのである。中島敦は中国体験によって初めて植民地社会に生きる人間存在に気づき、そしてそれらがその後の創作のテーマとなり、段々作家として成熟していくのである。

謝辞

本稿を執筆にあたり、指導教員の丁貴連先生から多くの激励の言葉と厚いご指導をいただきました。この場を借りて深く感謝の意を表します。

参考文献

- 閻瑜『新しい中島敦像—その苦悩・遍歴・救済』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2011）
- 川村湊『満州国 砂上の楼閣「満州国」に抱いた野望』（現代書館、2011）
- 川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書、1990）
- 川村湊「中島敦伝（2）植民地の“虎”」『アイ・フェール 14(4)』（紀伊國書店総務部、2004）
- 川村湊「中島敦伝（4）北方彷徨」『アイ・フェール 15(2)』（紀伊國書店総務部、2005）
- 加藤聖文『満鉄全史＜国策会社＞の全貌』（講談社、2006）
- 杉岡歩美「中島敦にとっての＜南洋行＞—昭和初期南洋という場—」『同志社国文学 68』（同志社大学、2008）
- 孫樹林「中島敦＜斗南先生論＞—東洋精神の博物館の標本」『国文学 181』（広島大学国語国文学会、2004）

- 高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）
- 田川真理子「満州移民事業の理念と現実＜前篇＞」『言葉と文化 4』（名古屋大学、2003）
- 塚瀬進『満州の日本人』（吉川弘文館、2004）
- 中島敦『中島敦全集 1』（筑摩書房、2012）
- 中島敦『中島敦全集 3』（筑摩書房、2012）
- 西井一夫『決定版 昭和史 別巻 I』（毎日新聞社、1999）
- 西澤泰彦『図説大連都市物語』（河出書房新社、1999）
- 藤村猛「中島敦＜D市七月叙景（一）＞論＝『安田女子大学紀要 34』（安田女子大学、2006）
- 安福智行「＜D市七月叙景（一）＞論—＜満州日報＞—を視座として—」『京都語文 8』（佛教大学、2001）
- 李順月「中島敦と朝鮮：「巡查のいる風景」を中心に」『アジア社会文化研究 8』（アジア社会文化研究会、2007）
- 陸嬋「中島敦の南洋行に関する一考察—＜南の空間＞における＜境界性＞を中心に」『言語・地域文化研究 19』（東京外国語大学大学院総合国際学研究科、2013）
- 渡辺一民『中島敦論』（みすず書房、2005）
- 渡辺ルリ「中島敦＜北方行＞に見る 1930 年中原大戦下の中国—＜北方行＞序論—」『東大阪大学短期大学教育研究紀要 7』（東大阪大学、2009）